

# 維新史 回廊だより

第4号  
平成19年  
(2007年)  
7月発行  
(年4回発行)

発行所 山口県環境生活部文化振興課

山口県山口市滝町一番一号 電話〇八三一九三三二二六二七

## ◇はじめに◇

「維新史回廊だより」をご愛読いただきありがとうございます。  
今回は、下関戦争（四国艦隊下関砲撃事件）で連合国に占拠され破壊された、「前田砲台」の発掘調査でわかったことをご紹介します。攘夷（諸外国の排除）の急先鋒であった長州藩は、下関戦争で、諸外国との軍事力の差を痛感し、このできごとが明治維新の一つのきっかけとなります。解説は、山口県教育委員会社会教育・文化財課の石井主査です。

## ◇前田砲台跡の発掘調査から◇

### ■前田砲台について

前田砲台は、外国船の来航などにより緊張が高まった幕末期に築かれ、一八六四年の下関戦争で激戦の舞台となりました。

長州藩は、攘夷の方針を固め、文久三年（一八六三）五月、関門海峡を通過するアメリカ、フランス、オランダの船に、海峡沿いに設置した砲台や軍艦から砲撃を行いました。しかし、報復として、六月にはアメリカの軍艦が長州藩の軍艦を砲撃して沈没させ、続いてフランス軍が前田砲台を攻撃し、破壊しました（下関事件）。

さらに、翌元治元年（一八六四）八月には、イギリス、アメリカ、フランス、オランダの連合艦隊が集結し、関門海峡沿いの砲台に対して砲撃を行いました。前田砲台は長州藩の中心的な砲台の一つで、奇兵隊が配置され、赤禰武人が指揮をとりましたが、上陸した連合軍に占領され、施設はことごとく焼き払われました。この際に従軍写真家が撮影した写真は多くの歴史教科書にも掲載されています（下関戦争、四国艦隊下関砲撃事件）。

## ○前田砲台はどこにあったのですか。

前田砲台跡は、下関市前田一丁目にあります。下関市街地の北東約四キロメートル、関門橋のある壇之浦からは北東約一キロメートルの周防灘の西端を臨む茶臼山の西南麓にあたります。現在、国道九号に面した階段を上ったところに、「前田御茶屋台場址」（台場Ⅱ砲台）の標柱が立っています。御茶屋の名は、江戸時代に長府毛利家の御茶屋（大名や幕府の要人等が旅の途中に休憩したり、宿泊する施設）が置かれたことにちなむものです。



関門海峡沿いの砲台跡（『馬関・鹿児島砲撃始末』（続日本史協会展書）をもとに作成）

## ○前田砲台はいつ頃造られたのですか。

前田砲台は、標高十メートル余りに築かれた低台場と標高十六メートル余りに築かれた高台場の二基から構成されています。そのうち低台場については、奇兵隊が度々訓練を行ったという記録も残されており、高台場に先行して築造されたものであることがわかります。

一方、高台場は、一八六四年に築造されました。一八六三年にフランスが砲台を占拠・破壊した時には築かれていなかったことが連合軍側の記録にあり、当時のフランス軍が作成した付近の図からも確認できます。

こうしたことから、長州藩は、連合艦隊との本格的な戦闘に備えて、低台場を修復するとともに、高台場を短期間で築造したことがわかります。

## ○発掘調査はいつ行われたのですか。

発掘調査は、山口県教育委員会が、平成十一年（一九九九）から平成十四年（二〇〇二）にかけて実施しました。

この前田茶臼山遺跡には、前田砲台のほか、県内では数少ない古代の瓦葺きの役所跡や地名の由来となった江戸時代の長府藩主の御茶屋跡などもありました。

発掘調査の後、遺跡は現状保存されています。

## ○発掘では何が見つかったのですか。

鉄製砲弾一発と鉛の銃弾三発が見つかりました。そのうち砲弾は、連合国軍から撃ち込まれたもので、着弾した当時のままの姿で出土しました。

形は球形で直径約二十センチメートル、重量は二十一キログラム強あり、ポンドに換算すると四十五ポンド以上に相当します。信管部分には真鍮のような薄い円形の金属板が被せてあり、中央部は四角にくぼみ、底面には縞状に擦れた痕が見られます。

下関戦争に従軍した金子文輔の「馬関攘夷従軍筆記」には、「前田砲台は甚だ多数の弾丸を被り



着弾した状態で見つかった砲弾

…」との情報が戦闘中に伝えられたと記されています。

また、銃弾のうち二発は椎の実形の銃弾でミニエー銃のものと思われる。一発はゲベル銃のものと見られる球形の銃弾です。連合軍が主に使用したミニエー銃は高性能で、飛距離や命中率に優れており、一方、長州藩が主に使用したゲベル銃は旧式で弾丸の装填に時間がかかり、飛距離や命中率に難があったといわれています。

## ○発掘調査でわかったことは何ですか。

低台場跡の南西部では、大砲を設置するために地面を削って整地された平坦面（大砲設置平坦面）、その背後の一段低く掘り込まれた平坦面（背後平坦面）と台場に溜まった水を排水するための溝が発見されました。この背後平坦面は装填する砲弾の準備などに使われる作業スペースと考えられます。また、その東側の背後平坦面では、当時のものと思われる焼けた土が広がっていました。

高台場は、低台場の北東にあり、その西辺に土塁が見つかりました。土塁は、厚い焼けた土で覆われており、その中には炭になった板材片等が含まれていました。土塁は、基底部で幅三メートル以上、高さは三十センチメートル足らずで、頂部には直線的に配列された敷石が見つかったことから、上に板塀が設置されていたものとみられます。基盤が東西方向に傾斜したまま築かれ、防禦のための土塁も極めて低く、板塀はこれを補ったと考えられることから急造であったことがうかがえます。

これまで下関戦争に関連した砲台跡の発掘調査は実施されていなかったことから、今回の調査は、砲台の構造を知る上で大変貴重なものです。また、連合軍に焼き払われた跡や撃ち込まれた砲弾など生々しい激戦の跡が明らかになりました。ただ、残念なことに、大砲を設置した明瞭な痕跡は見つかりませんでした。この点については、将来の調査に期待したいと思います。

## ○当時の前田砲台の状況がわかる史料はあるのですか。

東京大学史料編纂所の保谷徹氏を代表とする「欧米史料による下関戦争の総合的研究」の研究報告書に、占領当時のイギリス軍が作成した前田砲



台の実測図が紹介されています。

この実測図には、海に近い南側に低台場があり、弾薬庫を挟んで西に五門、東に一門の大砲が設置され、弾薬庫の西南に上陸用の坂道が描かれています。背後平坦面には、弾薬庫や格納庫として使われたと思われる小屋が記されており、その背後は水田となっています。

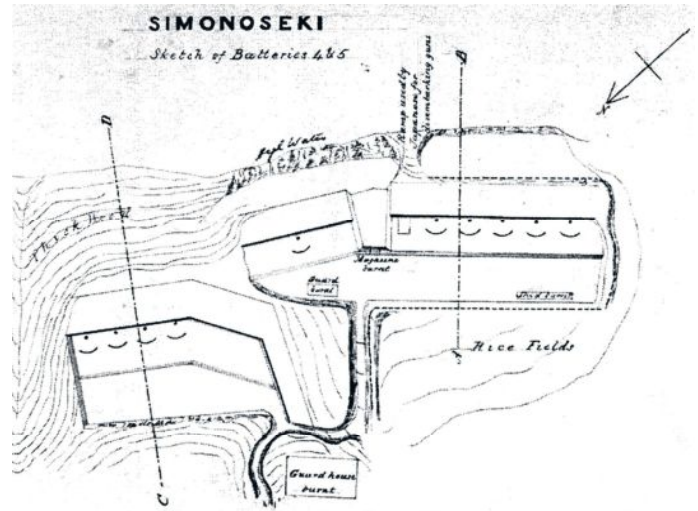
砲台の規模は、幅八十メートル強、奥行き約三十メートルです。

実測図は発掘調査結果と、ほぼ一致することがわかりました。

また、高台場については、実測図では低台場の北側に描かれています。大砲は、東寄りに四門設置されており、砲台の規模は幅約五十メートル、奥行き約三十メートルです。

高台場は、実測図どおりの位置関係に置くと、南に大きく張り出すことになってしまいます。現況の造成面は後に大きな変更の痕跡がないことから、発掘調査結果に基づいて、実測図の高台場部分を切り離して照合してみました。

こうして高台場で発見された土塁跡や段差などを基に実測図と照合す



イギリス軍作成前田砲台実測図

(保谷徹ほか「欧米史料による下関戦争の総合的研究」研究報告書、2001より)



前田砲台跡の現況写真

ると、東端部分がわずかにはみ出しますが、ほぼ現在の造成地内におさまりました。

以上のことから、イギリス軍の実測図は、かなり精度の高い実測に基づくものであることがわかりましたが、低台場と高台場の位置関係には「ずれ」があることから、それぞれを個別に実測して、位置関係は実測によらずに描かれたものであると考えられます。

### ○戦争の状況はどのようなものでしたか。

長州藩の戦力は、関門海峡沿いに設置した十数カ所あまりの砲台で、大砲は合計百門余り、兵員は二千人足らずでした。これに対して、連合国軍の戦力は、アメリカ国務省文書によると、軍艦十七隻、大砲二百八十八門、兵員五千四百人となっており、長州藩の倍以上の戦力でした。

参戦したイギリス兵の報告には、前田砲台の高台場・低台場、前田の海岸部にあった州岬砲台、壇之浦砲台が善戦したと記されています。このうち、前田砲台については、散弾や破裂弾が一分当たり六〜八発命中するようになつて、ようやく撤退させたと言われています。

また、この報告の中で、長州藩の台場構造について、崖を背負うような海岸沿いの低地に築造したのが致命的な欠陥だと指摘されており、実際砲弾は、後の崖で跳ね返って台場内に落ちたといわれています。

### ○長州藩の大砲はその後どうなったのでしょうか。

下関戦争で使用された長州藩の大砲は、戦利品として連合軍に持ち去られました。イギリスの資料によれば、その数は六十二門に上ります。これらの大砲の多くは、溶かされてしまったり、紛失してしまつたとみられています。作家の古川薫氏などの熱心な探索により、イギリスのロンドン大砲博物館、フランスのアンブリ



郡司喜平治作 荻野流一貫目青銅砲

フランスアンブリッド軍事博物館蔵(下関市立長府博物館保管)

ッド軍事博物館、アメリカのワシントン海軍基地、オランダのアムステルダム国立美術館にその一部が残されていることがわかりました。このうちアンブリッド軍事博物館にあった一門は、関係者の御尽力により貸与の形で里帰りし、下関市長府博物館に展示されています。また、壇之浦砲台が設置されていた関門橋付近の海沿いにあるみすそ川公園には、関門海峡に向けて長州砲のレプリカが並べられています。

○大砲はどこで作られたのですか。

使用された大砲には、外国から購入したものもありますが、多くは長州藩の鋳物師郡司家を中心として鋳造されました。具体的には、萩松本の郡司鋳造所や沖原鋳造所、長府、小郡、長州藩江戸砂村別邸（東京都葛飾区）などで製作されました。



大砲鋳造想像復元図(内山雅司画、山口県埋蔵文化センター『郡司鋳造所跡』より)

長府博物館にあるアンブリッド軍事博物館の大砲には、郡司喜平治の銘があり、萩市松本で郡司喜平治によって製作されたことがわかります。郡司家は、当初、主に和式大砲を製作していましたが、幕末期にはより性能の高い洋式大砲の製作に精力的に取り組まれました。

近年、東光寺の近くにある萩市松本の郡司鋳造所跡の発掘調査が行われ、大砲を鋳造した遺構や鋳型などが見つけられました。大砲を鋳造した遺構は高さ四メートル以上の「コ」の字型石組と中に設置された木組で、中から砲身の鋳型の一部が見つかりました。

現在、遺構は近くに移築復元元されて、大砲のレプリカも設置されるなど、史跡公園として整備され、公開されています。

◆企画展等情報◆

▼下関市立美術館(下関市長府黒門東町二二 電話〇八三二一四五一四一三) 高杉晋作と明治の元勳(平成十九年八月二十一日〜九月二日)

高杉晋作没後一四〇年を記念した企画展が開催されます。維新の実現を目にすることなく世を去った晋作とその熱き想いを受け継いだ明治の元勳と呼ばれた人々の関係を紹介するとともに、彼らの維新実現への、そして、新国家建設への情熱と志を追っていきます。

観覧料は大人二〇〇円、大学生一〇〇円、高校生以下無料(二十名以上の団体は二割引)です。

また、下関市立長府博物館で、八月十四日から常設企画展「坂本龍馬と下関」が開催されます。観覧料は、大人二〇〇円、大学生一〇〇円、高校生以下無料(二十名以上の団体は二割引)です。

▼伊藤公資料館(光市東荷二二五〇一 電話〇八二〇一四八一六二三)

伊藤公資料館開館十周年記念特別展

伊藤公の大礼服・刀と歴代総理大臣の書

(平成十九年九月一日〜十月三十一日)

光市出身の初代総理大臣伊藤博文は、桂小五郎、高杉晋作らと幕末の尊王攘夷運動に参加、明治維新後は、大日本帝国憲法の制定や国会の開設に力を注ぎました。この度光市に寄贈された大礼服・刀をはじめとした伊藤公の愛用の品々や歴代総理大臣の書を紹介します。

入館料は一般四二〇円、高校・大学生三二〇円、小・中学生二一〇円(二十名以上の団体は二割引)です。

〔あとがき〕大変遅くなりましたが、無事、第4号をお届けすることができました。今回は、下関戦争の戦場となった前田砲台の発掘状況を、実際に発掘に携わった石井主査に解説していただきました。発見された砲弾の写真をみると、当時の激戦の様子が目に浮かびます。次回発行は九月の予定です。 維新史回廊だよりは、山口県内の各市町、県政資料館に置いてあります。また、この内容は維新史回廊のホームページ(<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/ishin/index.html>)でもご覧いただけます。